

# 大衆メディアの中の女性像

## 夢二と華宵の美人画を中心に

文学部4年 浜根知恵

<目次>

I．はじめに

II．夢二美人と華宵美人

III．大正文化

(1) 都市と農村の格差

(2) ラジオと雑誌のもたらす大衆意識

IV．女性の理想と現実

(1) 都市への流入

(2) 恋愛事情

(3) 求められた女性像

V．おわりに

### I．はじめに

大正時代と聞いて何を思い浮かべるだろうか。明治と昭和という大きな時代に挟まれたわずか14年と半年という短い期間のその存在は、極めて薄いものかもしれない。しかしその内容は国内外共に激動の時代であった。テクノロジーの発達は目覚ましく、デパートの大量消費、電車に乗り通勤するサラリーマンとその主婦の登場、文化住宅など現在の我々の生活の基盤ができあがったのもこの頃である。ラジオや活動写真で流行歌や演劇を楽しみ、街にはネオンが輝き、ダンスホールやカフェに集まるモダンガールやモダンボーイたちがダンスを楽しんだ。こうした華やかな雰囲気はしばしば大正ロマンと表現をされ、和と洋のミックスされた異国情緒の甘い香り漂うこの文化は、現在でも様々な面で注目されている。

この大正時代を代表するものに、主に雑誌などに掲載されていた美少女の絵を指す「抒情画」と呼ばれるものがある。抒情画は正にこの時代の文化の世界観が凝縮されており、一大ブームを巻き起こした。この抒情画の人気を支えていたものは一体何だったのか。当時のメディアの発達と共に探ってい

きたい。なお、「大正ロマン」とは主に大正から昭和初期にかけての文化をさすが、ここでは大正文化として表現する。

## Ⅱ．夢二美人と華宵美人

大正時代に一世風靡した抒情画とはどのようなものだったのか。

大衆雑誌の普及が進むにつれ、より娯楽性を強めるために、目で楽しめるイラストがふんだんに盛り込まれるようになっていった。小説の挿絵から薬の広告まで、そのデザイン性もモダンで洗練されたものになっていった。こうした挿絵から人気画家がつつぎと誕生していくことになる。特に少女雑誌の人気挿絵画家はその地位を高めていく。彼らの手がける便箋から絵はがきは爆発的人気を博した。

中でも一大ブームを巻き起こした竹久夢二、高島華宵。中原淳一や、松本かつぢ、加藤まさを、落谷虹児などが代表される。彼らの絵の根底にはロマン主義が共通して見て取れるが、大きく分けると竹久夢二と高島華宵のこの二人の画家は、健康的な美ではなく、女性の色気が強く表現されているように思われる。そんな二人の抒情画について述べていく。

竹久夢二は大正を代表する人物として真っ先に名が挙げられるほど、この時代の寵児であった。夢二はいわゆる画壇には所属しないものの、美人画の評価は高く、他にも挿絵、絵はがき、便箋、本のジャケット、着物のデザインまでその活躍は幅広く、グラフィックデザイナーの先駆者でもあった。彼の描く女性は、今にも倒れそうな線の細い、憂いのある大きな目が特徴である。夢二式美人ともいわれ、夢二の絵が表紙となった雑誌は飛ぶように売れていったという。彼の描く女性の多くは着物を少し着崩し、体をしなやかにくねらせたポーズをとっている。慌てて出てきたかのようなその動きのある佇まいは、肉感的な女らしさと可愛らしさを宿し、ここに夢二の美学を見ることが出来る。彼の描く女性は彼の愛した女性たちがモデルとなっていた。彼女たちに様々なポーズをとらせ研究し、女性のさりげない仕草から醸し出

す色気や可愛らしさを追求したのだ<sup>1</sup>。

高島華宵もまた主に少年少女雑誌の挿絵を描き、流行歌には「華宵ごのみの君も行く」と名前が載せられるほど、熱狂的に迎えられた。華宵の描く人物は両性具有的であり、三白眼のうつろな視線はその先をいかようにも想像させられる。夢二の女性画よりも比較的ふくよかで健康的な体格であり、透き通るような肌の色と、絶妙な手の仕草が女性らしさを表現している。華宵は挿絵の他にもファッションデザイナーとしての顔も持っていた。彼は着物の柄や色彩などのバランスに大変な美意識を持ち、和装のトータルコーディネート必要性を説いた<sup>2</sup>。華宵が髪型から履き物までトータルコーディネートしたものが百貨店で揃えて購入できるようになると「華宵がちょっと変わった柄を描くと、デパートがすぐに真似して次の流行にすることもあったという<sup>3</sup>」。

夢二が日本の伝統的な女性の美を描いたのに対して、華宵の描く女性は都会的で西洋の影響を強く受けているように思う。しかし両者の絵もどことなく退廃的で、甘美な感傷の世界が漂っているのである。二人のそれぞれの画家は美に対する独自の信念をもち、急激な都市の変化に伴う「この時代の風潮や流行を敏感にとらえ<sup>4</sup>」、当時の人々の心情のあり方を繊細に描き出しているように見受けられるのである。

このような耽美的な美人画が流行したこの時代の文化が形成される過程には、メディアの発達による社会的背景があった。

### Ⅲ．大正文化

#### (1) 都市と農村の格差

大正から昭和初期にかけて大都市の都市化はほぼ完成され、都市部は電気、水道、ガスといった文明の恩恵を受けるようになる。しかしこの恩恵は都市に限ったものであり、地方の農村の生活は明治のままであり、都市と農村は全く異なった生活圏であったことをまず述べておきたい。この都市と農村の

二つの生活圏の隔離も大正の特徴のひとつである。

江戸から東京に改名して以来、明治のほぼ全期間をかけて東京の都市化は行われたのだが、明治の中頃まではまだまだ山があり、林があり、自然生活の面影を濃厚に保ち、農村との共有部分を多く持っており、都市はまだ農村の対立物とはなっていなかった。大正に入ると都市の外観は飛躍的な変化をとげた。道路は整備され、洋館が建ち、バス・タクシー・自動車、地下鉄の開通などで街は新しく生まれ変わった。都市を窓口にして世界中の情報が集まり、外国の文化を直接間接に受けられた人々は新しい思想に触れ、刺激と共に今ある現状の変化を求めた。演劇、芸術は新しい試みがなされ、デパートの発達は大量の商品宣伝と過当競争のため購買層を拡大し、大衆の消費を増大させた。またダンスホールやカフェーには洋装のモボ・モガが集まり、銀座を闊歩する銀ブラという言葉も生まれた。こうした外と内の両方の文明化が進み巨大都市東京は誕生したのである。一方、地方の農村は消費生活の水準は上らず、こうした都市化の条件を満たすことができずに文明とは無縁の、薪で火をおこすなどの生活をおくっていた。この差が都会の人間と田舎の人間の意識の違いを決定的なものにしていったのである<sup>5</sup>。このように、大正文化とは都市文化そのものであり、ここからは都市文化の特徴について述べていきたい。

## （２）ラジオと雑誌のもたらす大衆意識

日本のメディア史において、大正期は重要な時代といえる。それまでの人々の主な情報源は新聞、雑誌、書籍などの出版物が中心であった。しかしこれらはどの階層の隅々にまで行き渡り情報を共有するということではできなかったのである。印刷技術の未発達の時代には発行紙数にも限りがあり、このような書籍を手取る人物はある一定の有産者に限られていた。明治には印刷技術の向上により、「紙数の増加にともない読者の主力が有産・有識層から一般市民にシフトしはじめた<sup>6</sup>」ものの、まだ全ての階層に行き渡ることはできていなかった。

その理由は当時の識字率にあった。大正9年の文部省公表の就学率を見てみると、45～54歳（明治1～8年生まれ）では41%、30～44歳（明治9～23年生まれ）でも51%である<sup>7</sup>。しかしこの数字はあくまで小学校入学時の就学率であり、「実際には小学校中途退学者が非常に多かったため、字の読み書きができる者は40代後半では20%、30代でも40%足らずではなかったかと推定される<sup>8</sup>」。よってこれら活字から得る情報というものは、ある一定の有産・有識層に限定され、字の読めない者は間接的に情報を得ることしかできなかったのである。

その限られたマスメディアに大きな変化をもたらしたのがラジオである。日本のラジオ放送は大正14（1925）年から始まり、スピーカーから流れ出る音声はその届く限り幾人にも情報を提供でき、文字の読めない者にもすばやく直接情報を得ることが可能となった革新的な出来事であった。この耳で聞くマスメディアはその後、ニュース、教養、娯楽と番組の数も増えていき、人々の生活により密着する存在となっていったのである。しかし「ラジオは国家管理の下にあり、はじめから国策として出発した唯一のメディアであった<sup>9</sup>」。したがって全国各地に広く情報を提供できる唯一の存在から流れ出るものは、国の厳しい管理の下で制作されたものだった。そして何より、東京であろうと大阪であろうと、同じ時間に同じ内容を聞くことで、それまであいまだった国民一体の意識を確立することに成功したのである。

出版業界においても革新的な出来事が起こった。それは大衆向け雑誌の登場である。大衆雑誌の中でも最大の発行部数を持つ『キング』の発行元、講談社の野間清治は『キング』をつくるうえでの狙いについて「この超大雑誌が万人向きでなくてはならぬということであった。老人にも子供にも面白い、とても面白い、そして学者も実業家も会社員も職業婦人も、読みたくて堪らない、年齢、性別、職業、地位を超越した雑誌でなければならぬ。その上為になる、とても為になるものでなければならぬ、そしてまた安い、それも普通ではなくとても安いものでなければならぬ<sup>10</sup>」と述べている。野間はアメリカの大衆雑誌の編集方針をお手本に、小説を主にして「ニュース、音楽、

教養講座，料理番組など，硬いものから柔らかいものまでありとあらゆるものが並べられた<sup>11)</sup>誰でも楽しめる大衆雑誌を完成させたのである。

「大正14（1925）年に発売された『キング』創刊号は，たちまち74万部を売り切った。当時日本の内地人口は約6000万人であった。したがって74万部の『キング』の発行部数は，日本の内地の人間100人にたいして，1冊強という驚くべき数字となる<sup>12)</sup>」とあるように，大衆雑誌は人々に大いに受け入れられ，一家で『キング』を囲んで団欒するといった社会現象にまでなっていた。

昭和2（1927）年の雑誌売上年次総部数約4010万部（雑誌数80誌）のそのジャンル別割合<sup>13)</sup>（表1）を見ると，政経文芸雑誌など一部の知識層向けの雑誌はごくわずかであり，一般大衆向けの娯楽雑誌が大半を占めていたことがわかる。大衆向けの雑誌であるということはすなわち，誰にでもわかりやすく，受け入れやすい，その時代の平均的価値観になぞらえた内容でなくてはならなかった。その代表である『キング』に掲載される小説，美談や小話などは「義理人情，勸善懲悪，忠孝，といった既成道徳が自然にとけこんでいるので，読者にとって人生観のお手本となった<sup>14)</sup>」。

こうした大衆雑誌の「平均的人間の道徳観と人生観<sup>15)</sup>」の定着と，ラジオによる国民一体の意識は，大正デモクラシーの高揚のなかで西洋の自由と個人主義という新しい思想を知ってしまった者にとっては，未だ東洋の儒教的精神が強く残る現状と民主主義の理想との間で苦しむ要因をつくってしまったのである。こうした葛藤に苦しむ者たち，都市生活の孤独感，また物質的に豊かになり物足りなさを感じはじめた中産階級以上の者たちが向かった先は，精神的内面への関心であり，これが開放的で享乐的な大正ロマン文化の源流となったと考えられる。

表 1

青年雑誌	5. 0%	少年少女雑誌	17. 7%
政経文芸	9. 3%	婦人雑誌	23. 6%
幼年雑誌	13. 7%	大衆雑誌	30. 7%

#### Ⅳ．女性の理想と現実

夢二の絵も華宵の絵も、幅広い層に人気はあったが、特に若い女性たちの支持は絶大であった。彼女たちはこれら抒情画に何を見たのか。

##### (1) 都市への流入

メディアの発達は、地方と都市の情報の共有を可能にした。しかし、地方の人々は、新しい社会の動きを情報として知りながらも、身の回りはなんら昔と変わらない生活であり、根強い「家」制度に縛られたままであった。そしてそんな現状に違和感を抱き、志を持って都市へ飛び出す女性も現れはじめる。また一方で、そういった「家」の縛りに反発する女性と対照的に、志を持たずとも貧困のために身売りをし、都市へ流れ出る女性が多く存在した。こうした地方の貧困層の女性たちはまさに、家長の絶対的権限のもと、「家」のために利用される存在のままであった。こうした昔ながらの「家」制度に振り回された地方出身の女性たちが都市に溢れてくるのである。彼女たちは萩原朔太郎の『群衆の中を求めて歩く』に代表されるような、都会の強い孤独感を抱く日々を過ごしていたに違いない。

##### (2) 恋愛事情

大正デモクラシーの影響で、男女の交際はそれまでよりも自由な気風がではじめていた。「大正に生まれ育った娘たちはすでにふるい因習をふるいと見るだけの目を持っており、親との世代の相違を理解している。新しい時代の思潮は書物を通して一応身につけてもいる。異性との接触の機会も多く、芋掘りや栗拾いに男女連れだって出かけたり、同窓会で集まったり、文学や芸術というオブラードで包みながら恋愛論をたたかわせたりする<sup>16</sup>。」このような男女の交際に親たちも、新しい思想を一応は理解をしているという体裁を示し、良心的な態度でいたようである。しかしこれはあくまで「男女交際の

自由」であり、「かならずしも恋愛の自由でなく、まして結婚の自由ではなかった<sup>17</sup>」。男女交際の自由が認められるだけで、大きな変化ではあるものの、明治からの家父長制は未だ根強く残っており、自由な結婚が望めない交際は若者たちの苦しみとなっていった<sup>18</sup>。

### (3) 求められた女性像

女性たちも、多少の違和感を覚えながらも親の絶対的権限は心得ており、良い娘、妻であろうとした。当時は、姑の言うことを良く聞き、家事全般を行い、子を産み、夫を支え、家庭を守るのが女性の役割であり求められた姿であった。国は富国强兵のもと兵力を必要とし、女性に子を産むことを推奨するため良妻賢母の教育を行った。良妻賢母といっても、その内容はただただ家族に従順あり、家以外のことは何も知らぬ女であれという奴隷教育のようなものであった。女性の教育の場であるはずの女学校も、裕福層が増えたことで娘を女学校に通わせることが親たちのステータスになり、本気で自立する力をつけさせようとする親はほとんどいない。実際授業の大半は家庭科で占められ、花嫁修業の場と言っても過言ではない。新しい時代の自由を身を感じ始めていた彼女たちも、現実には「生活に無力なために、生きるがために結婚することを余儀なくされて<sup>19</sup>」いたのである。

自分ではどうすることもできない無念さを感じる彼女たちはまさに、抒情画に描かれる、はかなく悲しみを帯びた女性の姿に強く共感することができたのである。そこに自分を投影し、「宵待草」のように恋に生き、恋人をずっと待ち続ける女性に夢を託し、ある時は虚しく遠くを見つめる女性に自分を見て慰めたりしたのではないか。

しかし夢二の描く女性も、華宵の都会的なモダンガールも、描かれるのはあくまで男性から見た女性の姿であり、そこには画家たちの理想像が強く投影されている。彼らは力の弱い、何かにもたれかかる受け身の女性の姿に「もののあわれ」の美を見いだしたのである。それは新しいとはいえない、明治の女性の姿そのままであった。それにも関わらず大正の女性の支持を得たの



は共感だけが要因ではない。デパートの消費が、女性が主力だったことを考えると、女性の美に対する意識の強さが伺える。これはすなわち、女性が男性に養って貰う他に生きる術を持たないため、より「女性」らしくある必要があったからである。彼女たちは抒情画の中に、男性の求める「女性」の姿を見て取り、自然と甘受していったのである。

これら抒情画を支持していたのは「女性に限って言えば女学生や一般家庭婦人、芸者や喫茶店の女給、芸能人などであって、(略)職業婦人はこのなかに入っていない<sup>20</sup>」。大正も中頃になると女性の職業も増え、自活をする女性も現れる。これら本当の意味で新しい女性たちは、周りからの非難・嘲笑にも耐え、自らの力で多くの男女の自由を獲得できない苦しみや「社会的弊害を突破して、恋愛の自由や結婚の自由を実現するようになった<sup>21</sup>」。

明治までの街並みも趣味も服装も西洋的に変化を遂げ、何から何まで新しく生まれ変わったモダンな大正文化の中で、一大ブームとなった抒情画のその根底を支えていたのは、新しい思想に目覚めた自活した女性ではなく、明治から変わらぬ古い因習にがんじがらめに苦しむ人々であった。彼らの理想と現実に対する絶望感や無力感が原動力となり、大正ロマンのあの独特の負の雰囲気が醸し出されていたのである。

## V . おわりに

生きる術として男性好みの「女性」であろうとした、自活能力を持たなかった大正の女性たちに対して、現代の女性はその能力を十分備えてきた。しかし美に関する意識はますます高まっている。それも、外見の美だけではなく内面の美を強く求めているように感じられるのである。どうやら現代の女性は、周りの評価もさることながら、自分の（外見内面両方の）美しさを自分自身で感じることの充実感を幸福としているようだ。それは、現代ようやく、女性が他人に頼らずとも社会で自立して生きていることを表しているのかもしれない。

視覚的娯楽が少なかった大正時代において、抒情画はファッション誌であり、写真集であり、アイドル的存在をも兼ねていた。抒情画は少女雑誌の挿絵として多く登場していたのだが、繊細で多感な少女たちの感情を書きつづった詩や小説に抒情画を添えることで、より一層ロマン的な世界観が作り上げられた。少女たちは嫁ぐまでのわずかな自由な期間に、この小説と抒情画の夢の世界に浸ることで、恋をすることへの憧れと楽しさの疑似体験をすることができたのである。その抒情画がその後姿を変え現在に引き継がれているのが少女漫画であり、今も多くの少女たちに愛され楽しまれている。

最後に、大正ロマンの自由で開放的な風潮は、マスメディアによる平均的価値観の共有の結果がもたらしたものであるが、人々はその空気を享受し存分に楽しんでいた。実際、大正のマスメディアの発達是一般大衆に様々な娯楽をもたらした。大衆芸術がのびのびと育つ穏やかな時代でもあったのである。しかし戦時色が濃くなると、これら芸術は軟弱で国民の士気に影響するとされ、国家の厳しい管理の下、マスメディアによって排除されていった。甘美で華やかな文化を謳歌した大衆はその後、軍事色に染まっていくのである。価値観や常識はその時代によって様々であり、それは簡単に変化してしまうものでもある。いつの時代にも私たちは自分自身で真理を見極める力を身につけなくてはならないということを、改めて思い知らされる。

竹久夢二の美人画



図 1



図 2

高島華宵の美人画



図 3



図 4



図 5

### 参考文献

- 【1】 有山輝雄・竹山昭子編『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社，2004
- 【2】 カタログハウス編『大正時代の身の上相談』筑摩書房，2007
- 【3】 小林麻衣子『女が女を演じる』新曜社，2008
- 【4】 佐々木隆『日本の近代14 メディアと権力』中央公論新社，1999
- 【5】 中下邦彦編『名作挿絵全集 第四巻 昭和戦前・少年少女篇』平凡社，1979
- 【6】 女性史総合研究会編『日本女性生活史4 近代』東京大学出版会，1990
- 【7】 竹村民郎『大正文化 帝国のユートピア 世界史の転換期と大衆消費社会の形成』三元社，2004
- 【8】 松本品子編『高島華宵 大正・昭和 レトロビューティー』河出書房新社，2004
- 【9】 村上信彦『大正女性史 上巻 市民生活』理論社，1982
- 【10】 湯沢雅彦編『大正期の家庭生活』クレス出版，2008
- 【11】 NHK『美の壺』HP，バックナンバーfile16 .『夢二の美人画』<http://www.nhk.or.jp/tsubo/arc-20060721.html>（2008年12月16日）
- 【図1】 <http://unotukihana.fc2web.com/takehisayumeji.html>（2009年1月24日）
- 【図2】 <http://www.art-japan.com/meiga3/8.html>（2009年1月24日）
- 【図3】 <http://www.museum88.com/ehime/roman/roman.html>（2009年1月24日）
- 【図4】 <http://vw.wiwi.co.jp/u/greenleaf/UWLzjipjugTnfKqNFAZbH/?wakayama=21bfb41098c9781c279e...>（2009年1月24日）
- 【図5】 <http://blog.livedoor.jp/wadapapa/archives/2005-07.html>（2009年1月24日）

- 
- <sup>1</sup> NHK【11】参照
- <sup>2</sup> 松本【8】65頁参照
- <sup>3</sup> 松本【8】63頁
- <sup>4</sup> 松本【8】5頁
- <sup>5</sup> 村上【9】100～103頁参照
- <sup>6</sup> 佐々木【4】254頁
- <sup>7</sup> 湯沢【10】38頁参照
- <sup>8</sup> 湯沢【10】38頁
- <sup>9</sup> 津金澤聰廣教授「マス・コミュニケーション特講 - メディア史」(2007年)授業より引用
- <sup>10</sup> 有山・竹山【1】238～239頁
- <sup>11</sup> 湯沢【10】171頁

- 12 竹村【7】119頁
- 13 有山・竹山【1】238頁参照
- 14 竹村【7】120頁
- 15 カタログハウス【2】303頁
- 16 村上【9】185頁
- 17 村上【9】186頁
- 18 村上【9】186頁参照
- 19 村上【9】153頁
- 20 村上【9】187頁
- 21 村上【9】188頁